

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520009

研究課題名(和文) 生命倫理学におけるモンスター概念の変遷とその役割 メタファーとしての奇形

研究課題名(英文) The role and implications of the concept of monsters in bioethics

## 研究代表者

香川 知晶 (KAGAWA, Chiaki)

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：70224342

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：生命倫理学では「モンスター」という語が、医学的な「奇形」という意味を離れて、新たな医療技術をもたらす「怪物」といった意味に拡張されて使用されている。ここでは、この疾病概念のメタファー使用の典型例について、その歴史的起源を検討した。その結果、「モンスター」概念は、16世紀以来、何よりも神の意図を蔵している「驚異」の典型として論じられており、医学的な「奇形」概念と比べれば、もともとメタファーとして理解されていたことが明らかとなった。生命倫理学におけるメタファーとしての用法は「驚異」概念の現代における復活として解釈されるのである。

研究成果の概要(英文)：In reference to the concept of monster, we can easily point out many examples of the deviation of meaning from medically restricted one to more vulgar one to indicate a kind of horrible side effect brought about by the new medical technologies in biomedical literature. This metaphorical use of monster has historically the origin in the theological tradition of monster arguments since 16th century. After all a monster was a paragon of prodigies representing the divine will at the dawn of modern era. It was a metaphor to be found out the hidden message. This conception was gradually refined into teratological meaning by the end of 19th century. Therefore, the metaphorical use of the word "monster" in bioethics can be interpreted as the revival of the original meaning in our time.

研究分野：哲学

キーワード：モンスター概念 生命倫理学 哲学史

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 生命倫理学の成立過程で、疾病ないし異常をめぐりメタファーが生命倫理学の議論に大きな影響を及ぼしてきた。その典型例は、米国の「死ぬ権利」運動に登場する「モンスター」概念である。しかし、そうしたメタファーの影響を中心に検討した研究は行われてこなかった。

(2) 疾病そのものがメタファーとして社会的に大きな役割を果たすことは、邦訳のある評論家ソクタグの著書をはじめ、広く人口に膾炙しており、医療人類学、医療社会学、さらにはカルチュラル・スタディーズなどの研究主題とされ、すでに膨大な研究蓄積がある。また、生命倫理学においても、エンゲルハートの疾病論(1974)やアナスのモンスター論(1990)などの議論がなかったわけではない。しかし、特に生命倫理学の分野では疾病メタファーの機能を主題といえる研究は存在してなかった。

(3) しかし、生命倫理学においては「モンスター」という表象は米国のみならず、日本でも影響を行使してきた。日本の場合、可視的に異形の重度障害者や、さらには「老醜」への忌避・恐怖を喚起させ、重度障害新生児の治療停止から重度傷病者の安楽死・尊厳死問題へと結びついてきた。その結果安楽死運動及び優生保護法改定運動と障害者運動とのコンフリクトが生じてきた。しかし、その変遷を疾病メタファーという観点から総合的・多元的に解析する研究はいまだ未開拓である。

## 2. 研究の目的

以上のような研究の現状を踏まえ、本研究の目的を以下の2点に設定した。

(1) 「モンスター」概念をめぐって、医学的な「奇形(monstre)」概念の歴史的検討から出発し、日米欧にわたる生命倫理学の議論における変奏の過程を実証的に分析する。

(2) さらに、医学的概念から「世間的」疾病メタファーが派生してくる過程の多元的分析と日本における生命倫理学との関係解明という

新たな研究領域を開拓するための基本的視座を確保する。

## 3. 研究の方法

「モンスター」概念の医学的分析とその起源に関して、当初、医学的には古い歴史を有する「モンスター=奇形」が時代が下るとともに純粋な医学の場を離れ、見世物小屋、墮胎(間引き)、座敷牢などの世間的仕掛けを通じて一般人の深層心理に刻まれていったとする作業仮説を立て、この仮説の妥当性を検討するために、次の3点を中心に順次研究を進めることとした。

(1) 「モンスター」概念の医学的分析とその起源の解明：医学における「モンスター」はいわゆる先天奇形を指すが、その後各種の変性疾患、悪性腫瘍、感染症にもこの概念は拡張されてきた。そのため、医学を中心とし、歴史学、社会学、生命倫理学の基本文献の収集、整理、検討を行い、「モンスター」概念を範型として生命倫理学における異常・疾病概念の起源を明らかにする。

(2) 生命倫理学における「モンスター」概念の変遷過程の解明：起源の解明を踏まえ、生命倫理学の文脈における「モンスター」概念の変容の過程を実証的に明らかにする。ここでは文献調査とともにイタリア・フランスの医学博物館における「モンスター」展示について現地調査を実施する。

(3) 「モンスター」概念の社会的役割と生命倫理学との関係分析：以上の作業で得られたデータを基に、3名の研究者相互の緊密な連携によって、生命倫理学における疾病メタファーの意味を、文化的・政治的文脈をも視野に収め、総合的に分析する。この際、生命倫理学における主要な問題群の一つである「尊厳死」の概念とモンスター論またその変奏曲とも言えるパーソン論などと、どのような関係を持ちながら変遷してきたかを辿り、モンスター概念を変数として加えた場合の生命倫理学の議論の帰趨を日米欧における文脈に即した

形で見届ける。

#### 4. 研究成果

上記「2. 研究の目的」のうち、現在までに主として(1)を中心に一定の成果を得ることができた。その概要は以下の4点にまとめることができる。

(1)生命倫理学におけるモンスター概念の用法についての確認:生命倫理学では医学的な「モンスター=奇形」概念から出発し、その意味を拡大し、とりわけ医療技術の進歩がもたらす問題点を強調するためのメタファーとして使用されてきたことが確認される。代表例は生命倫理学の先駆的業績とされるJ・フレッチャーのMorals and Medicine(1954)における用例である。フレッチャーは医療技術の進歩が死ぬに死ねない患者を生み出しているとし、それを医療技術の生み出したモンスターだと規定する。その上で、生命の誕生時の「モンスター=奇形」に対するのと同様の医学的処置として生命の終わりの場面のモンスターに対する安楽死の肯定を導き出そうとする。ここで「モンスター」は単なる医学的奇形の意味を超えて、医療技術が生み出す怪物を指すメタファーとして使用され、その怪物がもたらす恐怖感・おぞましさや安楽死肯定論の立論を支える機能を果たしている。

(2)医学的「モンスター」概念の現状:現在の医学においては、「奇形」の問題は発生学的に完全に説明がつく現象として理解されている。そうした「奇形」について臨床の場面でどのように対応するかという問題は残っているものの、そこにはメタファーとしてのモンスター概念につきまとう恐怖・おぞましさ・驚異といった意味合いは完全に払しょくされている。そうした医学的な理解は、19世紀医学における奇形学の成立に由来するものである。さらには、そこで成立したモンスター概念は身体に対する自然学的・医学的な考察として古代ギリシアのヒポクラテスやアリストテレス以来の流れに沿ったものであることも確認された。

(3)近代における「モンスター」概念の展開:

しかし、文献を精査すると、19世紀的な奇形についての医学的な理解が確立されるまでの過程は医学的観点から見ればかなり錯綜していることも明らかとなる。16世紀のルネサンス期から近世初頭の17世紀にかけて、「モンスター」はきわめて活発な議論の対象となり、「モンスター」をあつかう書物も数多く出版された。しかし、それらの議論は医学的な厳密な意味での「モンスター」概念を超えたところでおこなわれたものだった。それは16世紀以降のモンスター論が1523年にルターとメランヒトンが発表した小冊子、『二つの恐ろしい図の説明、ローマの教皇ロバとマイセン・フライベルクで発見された修道士ウシ』を出発点としている影響が大きい。すなわち、モンスターは何よりもまず神学的枠組みの中で解釈されるべきものであった。モンスターはこの世界における様々な驚異(prodigies)の一つであり、そこに隠された神意こそ、読み取るべきだと考えられたのである。こうした概念枠に基づく議論が16世紀から近世初頭にかけてのモンスター論を牽引してきた。したがって、出発点は医学的に厳密に限定された奇形というよりも、むしろモンスターのメタフォリックな概念に求めざるを得ない。

(4)暫定的な結論と今後の研究課題:こうして、当初本研究が前提としておいた作業仮説は根本的な変更を迫られることになった。そのため、まずは16世紀以降のモンスター概念を医学的な概念へと収斂していく過程に即して分析することが必要となった。そうしたメタフォリックなモンスター理解を医学発生学的観点へと転換していく過程を分析した結果、デカルトの医学論が大きな結節点となることを確認することができた。これが現在まで本研究によって得られた成果であり、現在研究代表者を中心に、近世初頭におけるモンスター概念の変遷を通覧する論文の発表を準備している。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

大谷いづみ、死に至る憐れみ 啓蒙・抵抗・応答の一九七〇年代、現代思想、査読無、42(13)、2014、pp.178-197

Ishii, A., Fukuma, G., Kanaumi, T., Sohda, M., Misumi, Y., Kakinuma, N., Yonetani, M., Hamachi, A., Inoue, T., Yasumoto, S., Takeda, S., Ueno, S., Okada, M., Kaneko, S., Takashima, S. and Hirose, S., Association of nonsense mutation in GABRG2 with abnormal trafficking of GABAA receptors in severe epilepsy, *Epilepsy Research*, 査読有, 10S, 2014, pp.420-432, doi: 10.1016/j.epilepsyres.2013.12.005. 2014

香川知晶、オレゴン州尊厳死法をめぐる米国における「死ぬ権利」法制化の動き、理想、査読無、692、2014、pp.66-77

Mandal, M., Yoshimura, K., Saha, S., Yu, Z., Takeda, S. and Hiraoka, K., Biomolecular Analysis and Biological Tissue Diagnostics by Electrospray Ionization with a Metal Wire Inserted Gel-Loading Tip, *Analytical Chemistry*, 査読有, 86, 2013, pp.987-992, doi:10.1021/ac403261s.2013.

Su, S., Phua, S.C.,...Takeda, S. and Inoue, T., Calcium Dynamics within Primary Cilia Revealed by Organelle-Targeted Genetically Encoded Calcium Indicator, *Nature Methods*, 査読有, 10, 2013, pp.1105-07

大谷いづみ、図書紹介:立岩真也・有馬斉編生死の語り行い I 尊厳死法・抵抗・生命倫理学、リハビリテーション、査読無、554、2013、pp.33-34

大谷いづみ、「理性的自殺」がとりこぼすもの 続・「死を掛け金に求められる承認」という隘路、現代思想、査読無、41(7)、2013、pp.162-177

Yoshimura, K., Mandal, M.K.,... and Takeda, S., Realtime diagnosis of chemically-induced hepatocellular carcinoma using a novel mass spectrometry-based technique, *Analytical Biochemistry*, 査読有, 441, 2013, pp.32-37

竹田扇、成田啓之、神経系細胞の一次繊毛にみられるセンサー機能 X. ニューロサイエンスの最前線、*Clinical Neuroscience*、査読有、30(4)、2012、pp.465-8

Yoshimura, K., Chen, L.C., ... and Takeda, S., Analysis of renal cell carcinoma as a first step for mass spectrometry-based diagnostics, *Journal of the American Society for Mass Spectrometry*, 査読有, 23, 2012, pp.1741-49,

doi:10.1007/s13361-012-0447-2

Narita, K., Kozuka-Hana, H.,...and Takeda, S., *Biology Open*, 査読有, 1, 2012, pp.815-35, doi:10.1242/bio.20121081

Takeda, S., Yoshimura, K. and Hiraoka, K., Innovations in analytical oncology &#8211; Status quo of mass spectrometry-based diagnostics for malignant tumor, *Journal of Analytical Oncology*, 査読有, 1, 2012, pp.74-80

大谷いづみ、犠牲を期待される者 「死を掛け金に求められる承認」という隘路、現代思想、査読無、40(7)、2012、pp.198-209

[学会発表](計 11 件)

竹田扇、一次繊毛機能の多角的理解：一般性と特殊性、第 119 回日本解剖学会全国学術集会(招待講演)、2014 年 03 月 28 日、自治医科大学(栃木県・下野市)

Takeda, S., BING GUI SHEN SU: Rapid and Easy Diagnosis of Cancer by Mass Spectrometry and Machine Learning, The 4th Shimadzu (China) International Collaborative Laboratory Forum(招待講演)、2014 年 02 月 27 日、Ho Chi Minh City(Vietnam)

大谷いづみ、「問い」とともに障害を生きる QOL 概念の二重性、高度先進リハビリテーション医学研究会(招待講演)、2014 年 02 月 22 日、慶應義塾大学信濃町キャンパス(東京都新宿区)

香川知晶、治療停止・安楽死に関するアメリカの状況、第 25 回日本生命倫理学会年次大会、2013 年 11 月 30 日、東京大学本郷キャンパス(東京都・文京区)

香川知晶、文化の違いと生命倫理、第 25 回日本生命倫理学会年次大会(招待講演)、2013 年 11 月 30 日、東京大学本郷キャンパス(東京都・文京区)

Takeda, S., Multiple functions of glial primary cilia, Emerging roles of primary cilia in neuronal function. Neuro2013. (招待講演)、2013 年 06 月 21 日、国立京都国際会館(京都府・京都市)

大谷いづみ、問をはぐくむ、日本教育新聞社教育セミナー2012 in 大阪「今、求められるいのちの教育」(招待講演)、2012 年 12 月 20 日、たかつガーデンたかつ(大阪市・天王寺区)

Takeda, S., New approaches to the cancer diagnosis - Combination of probe electrospray ionization and machine learning, University of Yamanashi International Symposium. UYIS2012. (Special Lecture), 2012 年 12 月 03 日、University of Yamanashi(Kofu, Yamanashi)

大谷いづみ、生・老・病・死の言説構造と生命倫理教育/死生観教育、第 24 回日本生

命倫理学会年次大会、2012年10月27日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府・京都市)  
竹田扇、吉村健太郎、三澤透、濱本明恵、齋藤祐見子、一次繊毛を介した3型ソマトスタチン受容体によるカルシウム動態の調節、第35回日本神経科学大会、2012年09月19日、名古屋国際会議場(愛知県・名古屋市)  
Takeda, S., What ' s New in Cancer Diagnostics? - An Upcoming Innovative Approach Based on Mass Spectrometry and Logistics Regression, 14th International Congress of Histochemistry and Cytochemistry. Symposium(招待講演), 2012年08月28日, Kyoto Intenational Conference Center(Sakyo-ku, Kyoto)

川端 美季(KAWABATA, Miki)  
茨城大学・教育学部・研究員  
研究者番号: 00624868

〔図書〕(計11件)

香川知晶 他、医学書院、公衆衛生実践キーワード 地域保健活動の今がわかる 明日がみえる、2014、200

大谷いづみ 他、中央法規、高齢者のこころとからだ事典、2014、626

大谷いづみ 他、金芳堂、生命倫理と医療倫理 改訂3版、2014、260

香川知晶 竹田扇 他、岩波書店、生命倫理の源流 戦後日本社会とバイオエシックス、2014、342

香川知晶 他、青土社、生を肯定する いのちの弁別にあらがうために、2013、319

香川知晶 他、岩波書店、これからどうする 未来のつくり方、2013、674

大谷いづみ 他、丸善出版株式会社、シリーズ生命倫理学第2巻 医療倫理教育、2012、256

大谷いづみ 他、東京大学出版会、発達科学入門3 青年期～後期高齢期、2012、291

香川知晶 他、丸善出版株式会社、医学生のための生命倫理、2012、262

香川知晶 他、中山書店、専門医のための神経科臨床リュミエール 30 精神医学の思想、2012、257

香川知晶 他、丸善出版株式会社、シリーズ生命倫理学第2巻 生命倫理の基本概念、2012、251

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

香川 知晶(KAGAWA, Chiaki)  
山梨大学・総合研究部・教授  
研究者番号: 70224342

### (2) 研究分担者

大谷 いづみ(OOTANI, Izumi)  
立命館大学・産業社会学部・教授  
研究者番号: 30454507

竹田 扇(TAKEDA, Sen)  
山梨大学・総合研究部・教授  
研究者番号: 20272429